

「Early Colorectal Cancer Detection of Depressed Types of Colorectal Carcinoma」

秋田赤十字病院外科部長 工藤 進英 著

近畿大学教授・第1外科

安 富 正 幸

工藤進英氏による「Early Colorectal Cancer — Detection of Depressed Types of Colorectal Carcinoma」が出版された。本書は同氏により医学書院から発行された「早期大腸癌—平坦・陥凹型へのアプローチ」の英語版である。わが国の内視鏡の進歩は世界から注目を浴びているが、まだ十分に受け入れられるに至っていない。そこで日本の内視鏡技術の神髄を世界に広めるために英語版として出版されたものである。

長い間、大腸癌はポリープに由来すると考えられてきた。実際、大腸癌の大部分はポリープ由来であるが、ポリープ由来でない癌も存在していることは以前から予想され、de novo の癌と呼ばれていた。著者らにより平坦陥凹型の癌が多数発見され、それらを体系化し臨床上の意義を明らかにしたのがまさに著者である。平坦陥凹型の癌は直径 10 mm 以下で粘膜下層に浸潤することが多く、リンパ節転移を起こすので

内視鏡治療の対象ではなくなるばかりでなく、短期間のうちに進行癌に移行するものである。

大腸癌死亡が癌死亡の第1位になることが警告され、早期発見・早期治療が求められているとき、平坦陥凹型の癌の存在は重要である。この癌は集団検診に用いられている便潜血反応では陰性のことが多く、内視鏡によっても発見に熟練が必要である。平坦陥凹型の癌の内視鏡観察に関する著者の経験をまとめたのが本書であり、大腸内視鏡検査の術前準備や検査の初歩的な手技、正常粘膜の観察の仕方、粘膜病変のイメージ、粘膜病変の発見、色素撒布法、実体顕微鏡と拡大電子スコープでの pit pattern 観察による粘膜病変の診断、特に表面型の微小早期癌の診断など大変わかりやすく興味深く書かれている。付言すると最近の癌遺伝子の研究により平坦陥凹型の癌はポリープ由来の癌とは異なった発癌機構を持っていることが証明されてい

る。遺伝子的に de novo 癌であることが示されたのである。この事実は学会でも大きなインパクトを持って受け止められており、この面からも本書は貴重なものである。

本書では更にたくさんの典型的な症例が内視鏡写真、拡大スコープ、組織像などの美しいカラー写真とともに解説され、理解を助けている。これらの写真を見るだけでも内視鏡の観察力が上がることは間違いない。

本書は世界各国の内視鏡医にとって驚異の本であり、将来の大腸内視鏡診断を一変させる可能性を持っている。英語版であるが日本の内視鏡医にとっても極めて興味深いものである。更に言えば読者が海外で講演する際などにも有益なものである。ここに推薦する。

● A5 頁 176 原色図 602 色図 23
表 22 1996 定価(本体 15,000
円+税) 〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)